

# アスペクト解釈における瞬間事象に関する考察 ～可逆的変化と期間句の関係について～

浦木貴和（大阪産業大学非常勤講師）

[newharrylime@yahoo.co.jp](mailto:newharrylime@yahoo.co.jp)

## 1. はじめに

日本語におけるアスペクトの問題については、これまで様々な見地から考察が行われているが、本発表では、事態が瞬間的に終了する「瞬間事象」<sup>1</sup>について取り上げ、この中で可逆的変化解釈について取り上げる。可逆的変化とは、事態の持続時間を表す期間句「～の間」との共起によって、事態成立後の状態が一定時間持続することを表すもので、以下のような例がある。

- (1) 太郎は壁にポスターを1週間貼った。
- (2) 降雨のため、試合が15分間中断した。

(1)は、太郎が壁にポスターを貼り、その1週間後にまたそのポスターをはがした、(2)は、試合が15分間中断した後、また再開された、というように、それぞれの動詞によって示される事態成立後の状態が一定時間継続した後、再び事象の開始前の状態に戻る現象を、「可逆的変化」と呼ぶ。後の議論でも明らかにするように、この現象はその事態が限界的であること、瞬間的であることなどが特徴として考えられる。本発表では、最初に動詞句の限界的性と有界性を Depraetere (1995)の主張を紹介した上で、限界的性を見るテスト枠をいくつか紹介し、限界的性と有界性が本考察の可逆性に関しても重要な概念であることを検証したい。その後で可逆的変化を観察し、期間句との関係を考察する。

## 2. 限界的性と有界性について

事象のアスペクト解釈に関わる概念としては限界的性 (telicity) と有界性 (boundedness) の2つがあることが知られている。この2つはそれまで単なる用語上の違いとして認識されてきたのであるが、それを別の概念として捉えなおした研究に Depraetere (1995)がある。この

---

<sup>1</sup> この「瞬間事象」という用語に関しては、ある出席者の方から瞬間動詞に関する異議がなされたが、本考察で取り上げる「瞬間事象」とは、表された文が瞬間的な事態の成立を表す事象について言及したものであり、金田一(1950)が主張している「瞬間動詞」と同義ではないことに注意されたい。金田一の瞬間動詞は、瞬間性を動詞自体に内在する性質であると捉えており、その後奥田などによって批判がなされている。本稿においても、後の議論で明らかのように、瞬間性を動詞自体に内在する性質ではなく、様々な語用論的な要素や、副詞句などとの共起により決定されるものであると考えている。

中で Depraetere は、限界性と有界性について以下のように定義づけている<sup>2</sup>。

(3) Depraetere (1995:2-3);

(A)telicity has to do with whether or not a situation is described as having an inherent endpoint;  
(un)boundedness relates to whether or not a situation is described as having reached a temporal  
boundary.

上の定義は些かわかりにくい点もあるが、発表者の理解では、限界性とは動詞の内在的  
アスペクトに言及する概念であり、有界性とは表現されている文が開始点や終了点といっ  
た時間軸上での点がどのように表されているかに関わる概念である。

(4) 限界性による分類

- a. 弾が的にあたった。 [+telic]
- b. 裕代が倒れた。 [+telic]
- c. 裕代は建築会社で働いている。 [-telic]
- d. 裕代は京都に住んでいる。 [-telic]

(5) 有界性による分類

- a. 太郎は花子に5時に会った。 [+bounded]
- b. 亜紀子は1時間の間公園で遊んだ。 [+bounded]
- c. 広美は1991年から1998年までバンコクに住んでいた。 [+bounded]
- d. 猛はパンガン島に住んだことがある。 [+bounded]
- e. 千尋は大連に住んでいる。 [-bounded]
- f. 正史は今、推理小説を書いている。 [-bounded]
- g. 陽子はいつも近所の公園で遊ぶ。 [-bounded]

(4ab)では、「的に当たる」「倒れる」という事象は、内在的な限界点を持つと考えられる。  
つまり、その事態は、弾が的にあたった段階、倒れた段階が終了点であり、そこでその事  
象は終了する。それに対して(4cd)では「働く」「住む」という事態は、論理上は永久にそ  
の動作を続けることが可能であり、その意味において非限界的な事象を表していると言え  
る。

一方(5)の有界性による分類では、「5時に」「1時間の間」「1991年から1998年まで」とい  
った時間副詞や「ことがある」のような過去の経験を表す構文的条件により、終了の有界

---

<sup>2</sup> Declerck (1991)でも同様の考察が見られるが、Depraetere がより詳細な考察を行っている。

点があることが含意される。それに対して(5efg)ではテイルや「いつも」といった習慣を表す副詞句と共に、時間的な終了の有界点を持たないことが分かる。従って、これらの文は、結果として非有界的な文であると言える。

限界性は、もともとその動詞自体に終了点が存在するか否かに関わる概念で、アクチオンザルト (Aktionsart) と呼ばれることもある。こういった限界性に基づいた動詞分類には、Vendler (1967)、Smith (1991) などがある。また日本語の動詞の分類としては、金田一 (1950) がよく知られている。時間の都合上、詳しい分析は割愛するが、これらいわゆる古典的なアスペクト研究においては、アスペクトを動詞自体に内在している素性によって特徴づけようとしたのであるが、その後の研究を見てもわかるように、動詞のみを分類するだけでは十分ではなく、目的語や副詞句などを含む事象全体を詳細に考察する必要があることが知られるようになった。本考察もこの流れの中に位置づけられるものと考えられるが、ここでは動詞に内在する限界性をどのように識別するのかについて見ることにする。動詞の限界性の有無を識別するテストフレームはいくつかあるが、ここではまず Kenny (1963) による「未完了の逆説 (imperfective paradox) を取り上げる。「未完了の逆説」とは、動作持続のテイルと共に起したときに、非限界動詞であれば、事態の成立を含意し、限界動詞では事態の成立を含意しない、という現象のことである。

#### (6) 非限界動詞

- a. 洋が走っている。(=洋が走った。) [-telic]
- b. 先生が学生を褒めている。(=先生が学生を褒めた。) [-telic]
- c. 理沙がジルバを踊っている。(=理沙がジルバを踊った。) [-telic]

#### (7) 限界動詞

- a. 大工が家を建てている。(≠大工が家を建てた。) [+telic]
- b. 子供がプラモデルを組み立てている。(≠子供がプラモデルを組み立てた。) [+telic]
- c. 自転車のパンクを修理している。(≠自転車のパンクを修理した。) [+telic]

(6)の非限界動詞では、事態の開始点のみで事態の成立を含意することができるのに対して、(7)の限界動詞では事態の開始点だけでは事態の成立をできず、終了点がなければ事態の成立を含意できない。

また期間句「～の間」も、限界と非限界を識別するためのテストフレームとしても有用

である。一般に、非限界動詞では期間句と共に起して動作展開の継続時間を表すが、限界動詞では非文となるかまたは可逆的変化解釈のように、ある事態が成立後に生じる新たな事態の継続時間を表す。

(8) 非限界動詞

- a. 洋が 10 分間歩いた。
- b. 花子が一時間英語を習った。
- c. 先生が生徒を 30 分間（にわたって）叱った。

(9) 限界動詞

- a. \*父が 1 年間死んだ。
- b. \*光子が一匹のゴキブリを 5 分間殺した。
- c. ??猛が 3 日間東京へ行った。
- d. □義男が 30 分間机の上に本を置いた。

(8)の例では、いずれも動作の継続時間を表している。一方(9ab)では、そもそも期間句と共に起せず、(9c)では「行っていた」のように解釈されない限り非文法的である。また、(9d)では本発表で取り上げるような、可逆的変化の解釈を持つ。なお、(7)で見たような「建てる／組み立てる／修理する」などのような例では、動作の継続時間を表すが、これらはいずれも漸次的な変化を表す動詞であり、限界性が存在しないことを意味するものではない。

- (10) a. 大工が 1 ヶ月間家を建てた。  
b. 子どもが 1 時間プラモデルを組み立てた。  
c. 父が 30 分間自転車のパンクを修理した。

このように、動詞に内在する限界性はアスペクトに関する要素と判断することができる。しかし、上で示したテストフレームでは、瞬間的な事態を表す動詞類はその限界性をチェックすることができない。「未完了の逆説」では、持続的な事態を表す動詞類には有効であるが、「置く／貼る／壊す／死ぬ」といったような瞬間的に事態が成立してしまう動詞類ではそもそも動作持続の解釈を持つことができない。こういった瞬間的な事態を表す動詞の限界性を識別するテストフレームとして、影山(1996)や三原(2004)などで示されているような程度副詞句「たくさん」との共起における解釈の違いが挙げられる。

(11) 瞬間的な限界動詞

- a. 机の上に本をたくさん置いた。
- b. 壁にポスターをたくさん貼った。

- c. 子供がおもちゃをたくさん壊した。
- d. 貧困や病気のため、子どもたちがたくさん死んだ。

(12) 非限界動詞

- a. 太郎がたくさん走った。
- b. 先生が学生とたくさん話した。
- c. 理沙が本をたくさん読んだ。
- d. 光子が中国語をたくさん勉強した。

(11)と(12)の例では、複数事象の解釈を持つか単数事象の解釈を持つかの違いがある。まず(11)から見ることにする。限界動詞と共起した副詞句「たくさん」の例では、置いた本の、貼ったポスターの、壊したおもちゃの、死んだ子供の数、が多い、という動作数量が多い解釈を持ち、表された文は複数事象となる。一方(12)では、非限界動詞と共起すると、走った距離、話した内容、読んだ本のページ数、中国語の勉強量、がたくさんであるという動作の容量が多いという解釈を持ち、表された文は単数事象となる。これは限界性を持つ動詞では、必ず事態の終了点を持つので、「たくさん」によって修飾される動作の容量ではなく、一つ一つの動作を完結した事態として見るためである。一方非限界動詞では、終了限界を持たないため、「たくさん」によって修飾される動作が容量を表すのである。ところで、日本語話者によっては、(12c)の文を読んだ本の冊数がたくさん、という理解をする話者がいる。それは、目的語である「本」が項限定詞として理解され、それによって限界動詞と判断されるためである。しかし、「読む」自体は理屈の上では永久に読み続けることができる非限界動詞である。ここで重要なのは、非限界動詞が「たくさん」と共起すると、動作の容量を表すことができ、限界動詞ではそれができないという点にある。

それでは、上で示されたような動詞の継続性と瞬間性を識別する基準を動詞自体に内在する特質と認めることは妥当なのであろうか。次節でこの問題について取り扱うことにする。

### 3. 瞬間性と継続性

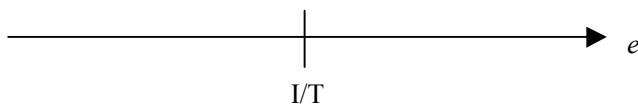
これまで Vendler (1967)や Smith (1991)などの研究によってさまざまな動詞分類の研究がなされてきているが、本発表で問題となる瞬間性と継続性に関して、前者の特徴を持つものを到達動詞(achievement)、後者の特徴を持つものに達成動詞(accomplishment)がある。しかしながら次に見るようにこの区別が実は曖昧である点が指摘されている (Tenny (1994))。

- (13) a. その超新星は何百万年もかかって爆発した。  
 b. かつて宇宙は一瞬にして膨張した。

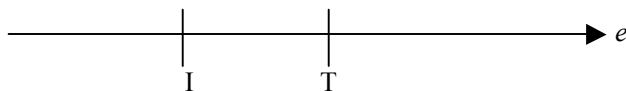
(13)の例でみるように、「爆発する」は本来瞬間的な事象を表す動詞であると考えられるが、「何百万年もかかって」のような修飾節と共起すると達成動詞的な解釈が得られる。また「膨張する」は直感的には一定の時間幅を持つ動詞であると考えられるが、やはり「一瞬にして」と共起すると瞬間的な事象を表すことが可能になる。このように見ていくと、Vendler や Smith などが取り上げている到達動詞と達成動詞を識別する基準である瞬間性と継続性が動詞自体に内在する特質として見ることは誤りであることが分かる。瞬間性と継続はむしろ動詞を含めた目的語や副詞句などとの共起によって生じる事象全体に関わる解釈であると捉える事ができる。

それでは、ここで問題にする「瞬間性」と「継続性」をどのように捉えたら良いのであろうか。ここでは、これらを有界性に関わる問題と捉えることを提案したい。これは、事態の開始点(Initial Bound)と終了点(Terminal Bound)の間の時間差の有無によって「瞬間性」と「継続性」が区別されることを意味する。

(14) 瞬間事象



(15) 継続事象



つまり、瞬間事象を表す文では、動詞で示される事態の開始点と終了点が同時的であり、継続的事象を表す文では、動詞で示される事態の開始点と終了点との間に時間的な差があるということである。この有界性の概念が可逆的変化を引き起こすか否かに関わってくることになる。

次節で、この可逆的変化の問題について、詳細に論じることにしたい。

#### 4. 可逆的変化

最初の方でも説明しように、可逆的変化とは期間を表す時間副詞と共起して、その事象が成立し、その結果が一定時間継続した後、また事象開始前の状態に戻ることが含意される現象のことを言う。可逆的変化の解釈を持つ動詞類は、動詞自体に内在的限界性[+telic]を持つ。以下で示すような文において、可逆的変化の解釈が見られる。

- (16) a. カウンターに 30 分間黒霧島のボトルを置いた。  
 b. 壁にポスターを 1 週間貼った。  
 c. 会議の間、胸に名札を付けた。
- (17) a. 30 分間照明を消した。  
 b. 入り口を 30 分間閉めた。  
 c. デモ隊が広場を 3 日間占拠した。
- (18) a. 公園のベンチに 30 分間座った。  
 b. 30 分間立った。  
 c. ホラー映画を見ている間、彼の手を握った。
- (19) a. 同じ服を 2 日間着た。  
 b. 半年間同じ靴を履いた。  
 c. 試合の間、応援チームの帽子をかぶった。
- (20) a. 30 分間照明が消えた。  
 b. 休憩時間の間、工場の機械が止まった。  
 c. 降雨のため、試合が 15 分間中断した。
- (21) a. #ビールを 30 分間冷蔵庫に冷やした。  
 b. #ミルクを 5 分間温めた。  
 c. #カレーを 1 時間煮込んだ。

上の (16) から(20)までの例は、それぞれ位置変化、対象の状態変化、姿勢変化、再帰性、非対格の動詞を含む文である。これらの動詞にみられる特徴は、いずれも瞬間的に事態が完結し、対象の何らかの変化を表す動詞であると言える。対象変化を表す動詞であっても (21)のように非限界動詞と共起すると、事態完結後の期間を表すことはできず、動作が持続中であるという解釈しか持つことができない。前節でも指摘したとおり、瞬間事象は、副詞句やその文が表す語用論的な状況によってもその解釈が決定されるのであるが、可逆的変化の解釈が成立するためには、事態が瞬間的に完結することが読み込まれている必要がある。従って、動作持続の様態を表す副詞句「ゆっくり」などと共起すると、可逆的変化の解釈を持つことができない。

- (22) a. \*カウンターにゆっくり 30 分間黒霧島のボトルを置いた。  
 b. \*デモ隊がゆっくり 3 日間広場を占拠した。  
 c. \*試合の間応援チームの帽子をゆっくりかぶった。

これは、「ゆっくり」が動作の様態を表す副詞であるため、可逆的変化の期間句と共起す

ると、事態成立後の状態を表す解釈と動作様態という、全く異なる二つの事態を一つの文で表すことになるためである。

また(19)で挙げた再帰動詞は、動きと変化の両方を表すことができることが知られているが、工藤(1995)が指摘しているように、通常は変化のほうで解釈され、動きを表す時には何らかの構文的条件が必要とされる。

- (23) a. お母さんが浴衣を着ている。 <結果継続>  
b. お母さんが鏡の前で浴衣を着ている。 <動作継続> (工藤(1995 : 79))

(23a)のテイルと共起では結果継続の解釈が現れるのであるが、(23b)では動作継続が現れる。これは、「鏡の前で」のように動作が行われる場所を表すデ格が共起しているためである。このように考えると、(12)でも期間句と共起した場合は事態完結後の期間句が継続時間として解釈されるのは当然であると言えよう。また、(7)で示したような「建てる／組み立てる」なども同様に、目的語の存在場所を表すニ格句があれば、やはり結果継続、動作が行われる場所を表すデ格と共起すると動作持続の解釈が優先的になる。

- (24) a. 大工が芦屋に家を建てている。 <結果持続>  
b. 大工が芦屋で家を建てている。 <動作持続>  
(25) a. 芸術家が小高い丘に巨大なオブジェを組み立てている。 <結果持続>  
b. 芸術家が小高い丘で巨大なオブジェを組み立てている。 <動作持続>

さらに動作主体の移動を表す「走る／泳ぐ」といったような動詞類は、可逆的な解釈を持たない。

- (26) a. 太郎がグラウンドを1時間走った。  
b. 裕代が1時間海で泳いだ。

(26)の場合、確かに一定の時間その行為が続いた後、それぞれ走る前、泳ぐ前の状態に戻るといふ解釈は可能であるが、これらの動詞類はいずれも非限界動詞であり、対象の変化を含まず、そもそも期間句自体が事態完結後の状態の長さを表していない。可逆的变化はあくまで事態完結後の状態の継続時間を表すものを言う。従ってこれらの文を(16)～(20)に挙げたような例と同列の可逆的变化とみなすことはできない。このように、可逆的变化の解釈を持つ事象は、いずれも瞬間的かつ対象の変化を表していなければならない。

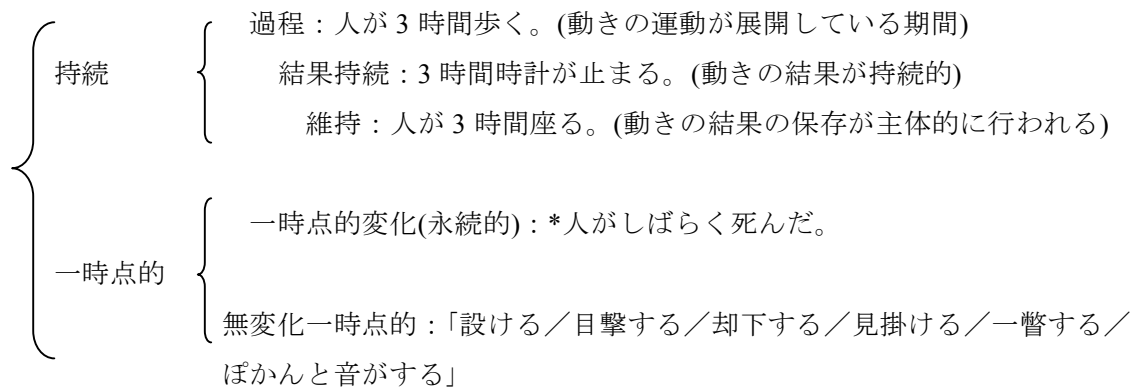
しかし、瞬間的で対象の変化を引き起こす動詞類がすべて可逆的变化の解釈を持つとはかぎらない。



- (27) a. \*太郎が 5 分間一匹のゴキブリを殺した。  
 b. \*テロリストが大統領を 5 分間暗殺した。  
 c. \*陽子が 30 分間生ゴミを捨てた。  
 d. \*赤ん坊が 1 時間生まれた。  
 e. \*花子がお気に入りの財布を 30 分間落した。  
 f. \*ダイナマイトが 30 分間爆発した。  
 g. \*可愛がっていたペットが 1 年間死んだ。  
 h. \*電車が 30 分間駅に到着した。  
 i. \*タイタニック号が 97 年間沈没した。  
 j. \*山火事を 1 時間消した。

(27)では、いずれも瞬間的な動作であり、対象の変化を表す動詞類という意味では、可逆的变化が可能な文のはずであるが、実際にはそのような解釈を持たない。変化を受ける目的語が複数項で、持続的な解釈をされない限り、非文を生じてしまう。森山(1988)は、動詞句が表す局面を大きく二つに分け、それぞれをさらに下位分類している。

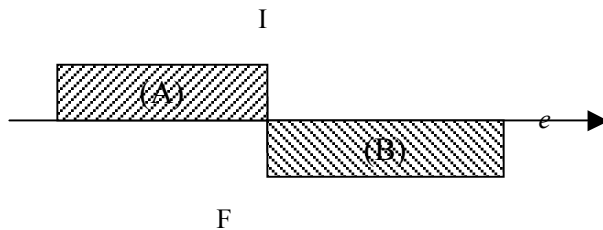
(28) 動詞句が表す局面



上に示した分析に従うなら、可逆的变化を引き起こす動詞は、「持続」の局面のうち、「結果持続」と「維持」という局面に分類されるものであると考えられる。また、非可逆的变化の動詞は、一時点的変化に分類されるものであると考えられる。つまり、通常他動詞文における可逆的变化の文では、動きの結果を動作主が意志的にコントロール可能であるということになる。また、非対格動詞における可逆的变化の文では、動きの結果が持続されることによって解釈可能であるということである。この二つのタイプに共通する特徴は、それぞれ、事態完結後の持続が動詞句の中に含まれていることを含意する。では事態完結後の持続の有無とは何によって決定されているのであろうか。

本考察では、これを有界性と結び付けて考えることを提案したい。結論から先に述べると、可逆的変化の解釈を持つと持たない文では、開始点を強調するのか、それとも終了点を強調するのかによって文法性の判断に差が出るということである。

(29)



前述のとおり、可逆的変化の文であっても、非可逆的変化の文であっても、限界動詞であり、瞬間的な事象であるという点は共通しているが、上の図に示しているように、可逆的変化を引き起こさない(A)は、動きが終了点を捉えるのではなく、開始点の部分をつまえているということである。事態の開始部分を強調するということは、必然的に動作性を含意することにつながる。発表者の言語直観に従った限りでは、(27)の例はいずれも、動作開始の局面を強調しているように思われる。一方、可逆的解釈を許容する(B)では、動作が完結した後、つまり終了点を強調しており、必然的に結果状態の継続を含意することにつながる。

このようにアスペクト解釈において、事態の開始点と終了点のどちらを強調するのかによって文法的振る舞いが異なるという点については、以前より統語論や意味論でも指摘されている (Ritter and Rosen (2000), Borer (1994)など)。しかし、この分析の問題点は、瞬間的な事象において、開始点と終了点が同時的であるとするならば、それらをどのように識別するのかという証拠が必要になるのであるが、いまだに決定的なものは見つかっていない。そこで本考察では、瞬間的な事態においても開始点と終了点があることを示す証拠として、事態がある一定の時間になるまで続くことを示す副詞句「(時間)まで」との共起による解釈の違いを見ることにしたい。

- (30) a. お客が帰るまで、黒霧島のボトルを置いた。  
 b. 軍隊が制圧するまで、デモ隊が広場を占拠した。  
 c. ホラー映画の上映が終わるまで、恋人の手を握った。  
 d. 汚れて黄ばむまで、お気に入りの T シャツを着た。  
 e. 雨が止むまで、試合が中断した。

- (31) a. ゴルゴ 13 は引退するまで、政府要人を暗殺した。  
b. 猫は飽きるまで、ネズミを殺した。  
c. そのトラック運転手はほかのドライバーから指摘されるまで、荷物を落とした。  
d. 戦争が終わるまで、民間人が死んだ。  
e. 管制官がストップをかけるまで、飛行機が空港に到着した。

先に説明したように、「まで」句は文によって表されている事態の有界点を表す副詞句であるが、(30) では、いずれも可逆的変化解釈を許容する動詞を含んでおり、いずれも「まで」が表す時間が来るまでの間、事態完結後の状態が続くという単数事象解釈を持つ。それに対して、(31)の可逆的変化解釈を許容しない動詞を含む文では、その時間が来るまでの間、何度も同じ動作が繰り返されるといふ反復事象解釈を持つ。このことが意味しているのは、たとえ瞬間的事態を表す限界動詞であっても、強調される部分が異なることを示している。即ち(30)の例では、事態の終了点が強調されているため、その事態の終わりまで一つの状態が続くということを表し、(31)では、事態の開始点のみが強調されているため、事態の終わりが読み込めない結果、動きの局面が強調されることになり、反復事象解釈が読み込まれることになる。

このように、可逆的変化事象は、瞬間事象を表す文の中で、動きの終了点の部分が強調されるタイプの動詞において見られる特徴であり、動きの開始点の部分が強調されるタイプの文では、可逆的変化の特徴を持たないと結論づけることができる<sup>3</sup>。

上記の結論が正しいとするならば、期間句との関係も明らかになってくる。統語的には、可逆的変化解釈を持つ副詞句は、終了有界を含む句範疇内に生起され、非可逆的変化の文では、開始有界を含む句範疇内に生起されることになると考えられる。

## 5. まとめと課題

ここまできると、次のようになる。瞬間事象は、開始点と終了点が同時的であるため、一見その事象が動きの始まりを表しているのかそれとも終わりを表しているのか判然としないように見えるが、実際には動きの開始点が強調される事象と終了点が強調される事象の 2 つに分けられる。そして、前者では期間句と共起すると可逆的変化を引き起こすのに対して、後者では、そのような解釈を持つことができず、非文を生じるかまたは

---

<sup>3</sup> 参加者の方から可逆的変化という現象は、「意志性」に関わる問題であり、非対格動詞についても、その表された現象に対して動作者の意図的なコントロールが関与しているのではないかとのご指摘を受けた。しかし、発表者の考えでは「意志性」とは主語の有生名詞句に対して動作主という意味役割を与える要素であると考えている。この点で非対格動詞が、そもそも動作主を取らない動詞であることはすでに多くの先行研究で知られている。従って、この可逆的変化においても、「意志性」は中核的な問題ではないと考えている。

複数事象解釈が強制される。また、期間句は前者が終了有界を含む句範疇の付加位置に生起され、後者が開始有界を含む範疇の付加位置に生起されることを仮定した。

今回の発表では、意味の記述をメインに行ったが、統語的な分析は時間の関係で詳細に扱うことができなかった。今後は、期間句の生成位置、外項及び内項との関係、また可逆的变化が統語的な枠組みの中で行われるメカニズムの解明など解決すべき問題がある。

#### 【参考文献】

- 井本 亮 (2006) 「状態変化の修飾—副詞的修飾関係の決定要因と事象構造」矢澤真人・橋本修 (編)『現代日本語文法 現象と理論のインタラクション』ひつじ書房
- 岩本遠億 (2008) 『事象アスペクト論』 開拓社 (井本亮との共著)
- 浦木貴和 (2006) 「テアル構文に関する考察」『日本語日本文化研究 第16号』 大阪外国語大学
- 浦木貴和・依田悠介 (2007) 「補助動詞構文における(非)限界性と格の表示〜テアル構文の分析を中心に〜」大阪外国語大学・チュラロンコーン大学合同発表会ハンドアウト
- 奥田靖雄 (1985) 『言葉の研究・序説』 むぎ書房
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』1976 むぎ書房
- 外崎淑子 (2005) 『日本語述語の統語構造と語形成』ひつじ書房
- 三原健一 (1997) 「動詞のアスペクト構造」中右実 (編)『日英語比較選書7: ヴォイスとアスペクト』研究社 (鷲尾龍一との共著)
- 三原健一 (2004) 『アスペクト解釈と統語現象』(松柏社)
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』 明治書院
- Borer, Hagit (1994) The Projection of Arguments. *University of Massachusetts Occasion Papers in Linguistics* 17.
- Depraetere, Ilse. (1995) “On the necessity of distinguishing between (un)boundedness and (a)telicity” *Linguistics and Philosophy* 18:1-19
- Kenny, Anthony (1963) *Action, Emotion, and Will*. Humanities Press.
- Jackendoff, Ray. (1991) “Parts and boundaries” *Cognition* 41:9-45
- MacDonald, Jonathan E. (2008) “Domain of aspectual interpretation” *Linguistic Inquiry* 39:128-147
- Ritter, Elizabeth and Sara Rosen. (2000) “Event Structure and Ergativity” In C. Tenny and J. Pustejovsky eds. *Event as Grammatical Objects*. CSLI Publications.
- Smith, Carlota. (1991) *The Parameter of Aspect* Kluwer Academic Publishers

- Tenny, Carol L. (1994) *Aspectual Roles and The Syntax-Semantics Interface*. Kluwer Academic Publishers.
- Ritter, Elizabeth and Sara Rosen. (2000) "Event Structure and Ergativity" In C. Tenny and J. Pustejovsky eds. *Event as Grammatical Objects*. CSLI Publications.
- Thompson, Ellen. (2006) "The structure of bounded events" *Linguistic Inquiry* 37:211-218
- Vendler, Zeno. (1967) *Linguistics and Philosophy* Cornell University Press.